



>>> 自分時間

出会いを生かす人づき合いのヒント 第4回

地域とつながり人生が変わる 「サードプレイス」の見つけ方

はじめに

「サードプレイス」とは、家庭（第1の場）でも職場（第2の場）でもない第3の居心地の良い場所を意味します。最近では、地域のサードプレイスが増えており、注目されるようになっていきます。サードプレイスが注目される理由には、人生100年時代の到来、コロナ禍の影響などがあるようです。

本稿では、サードプレイスとはどのようなものか、人生100年時代の到来、コロナ禍の影響という環境下でなぜ注目が集まるのか、その具体例、見つけ方を考えていきます。

人生100年時代の到来

人生100年時代という言葉が注目されるようになったのは、『ライフ・シフト』（リンドン・グラットン、アンドリュース・スコット著、

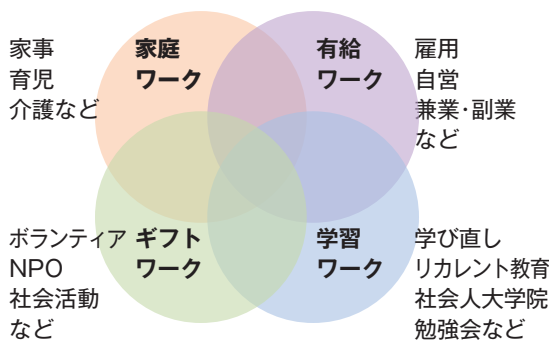
池村千秋訳、東洋経済新報社、2016年）で、2007年生まれの日本の子の半数が、107歳まで生きるとなるという推計が示されてからでしょう。同書では、そのような時代では、「教育」「仕事」「引退」の3ステージモデルが時代遅れになっているとしています。

3ステージモデルでは、社会に出るまではひたすら教育を受け、社会に出てからは仕事に専念し、定年後は引退ということになります。しかも、3ステージは一方通行で、戻れることも同時進行もできません。そうなると、もし定年を60歳あるいは65歳とするならば、40年以上は引退して過ごすという事になります。これは現実的でしょうか。『パラドックスの時代』（チャールズ・ハンディ著、小林薫訳、ジャパンタイムズ、1995年）では、生涯の活動時期の長期化（人生の長期化）に対して、4つのワークを組み合わせ、「ポートフォリオ・ワーカー」として



法政大学大学院政策創造研究科
教授・研究科長
石山 恒貴

【図表1】 4つのワークの組み合わせ
(ポートフォリオ・ワーカー)



出典:『パラドックスの時代』の4つのワークを筆者が図式化

生きればよい、としています。4つのワークとは、【図表1】にあるとおり、賃金を得る「有給ワーク」、家庭の維持保全を行う「家庭ワーク」、コミュニティや社会に貢献する「ギフトワーク」、継続的に学びを深める「学習ワーク」を意味します。ワークとは、仕事というより、**人生の役割に該当する概念**で

【いしやま・のぶたか】博士（政策学）。NEC、GE、米系ライフサイエンス会社を経て、現職。越境の学習、キャリア形成、人的資源管理等が研究領域。主な著書に『日本企業のタレントマネジメント』、『越境の学習のメカニズム』。



>>> 出会いを生かす人づき合いのヒント

す。この4つを人生のあらゆる年代で組み合わせさせていけば、社会に出てからも、仕事だけに専念する、ということにはなりません。

また「引退」という考え方もそのものが当てはまらず、生涯、何らかのワークに携わっていくこととなります。より充実した生活になる可能性が高くなっていくのではないのでしょうか。そして、この4つのワークを**実践する場所が、サードプレイス**ということになるのです。

コロナ禍の影響

コロナ禍において、私たちが感じたことは何でしょうか。筆者が感じたことは、効率だけを優先する社会の限界です。どんなに効率を優先したところで、そこに持続性がなければ、社会の機能は一気に損なわれてしまいます。私たちは、いったん立ち止まって、社会や人生とは何か、ということについて考える時間を与えられたのかもしれない。

そもそも経済という言葉は、「**経世済民**」(国を治め民の生活を安定させること)という、社会をいかにより良きものにしていくかという考え方が最上位であったはずですが、経済活動、企業活動が進む中で、利益が出なければ企業は存続できないのだし、そうであれば効率こそ最優先だ、という考えが前提になってしまったのではないのでしょうか。そのような前提では、「青臭い理想論

を言う前に、まず利益を出せ」という理屈が説得力を持つてしまいます。

しかし、私たちは、本来、社会をどのようにより良きものとし、その中でどう暮らし生きていくかということ、最上位に位置づけてもいいのではないのでしょうか。自分たちが、どう暮らしてどう生きたいのか、サードプレイスにはそれを考えるヒントがあります。

サードプレイスとは何か

サードプレイスは、アメリカの社会学者であるオルデンバーグによって、1980年代に提唱されました。提唱された背景には、当時のアメリカの都市化があります。

アメリカの都市化は、自動車に依存する社会の進展でもあり、人々は、車で家庭(第1の場)と職場(第2の場)を往復して生活していきます。こうした暮らしはまさに効率的であるわけですが、その効率性ゆえに人生から、憩いと居心地の良さが失われてしまいます。

オルデンバーグが、サードプレイスの理想として描く場所は、イギリスのパブやフランスのカフェです。こうした場所に、車で行くことはないはず。ふらつと歩きながら、近所のパブやカフェに立ち寄る。すると、そこには、顔なじみのメンバーや、新しく出会ったメンバーがいる。そうしたリラックスした雰囲気の中で、**談論風発**(談話や議

論が活発に行われること)が生じ、知識生成にもつながっていく。こんな場所こそが、現代社会のストレスを和らげる人生の潤滑油になると、オルデンバーグは考えました。

オルデンバーグは、「中立性、社会的平等性の担保、会話が中心に存在すること、利便性があること、常連の存在、目立たないこと、遊び心があること、もうひとつのわが家」という8つのサードプレイスの特徴をあげています。この特徴は、企業などの階層的な組織と対照的です。

たとえば、職場近くの居酒屋に、職場のメンバーと一緒に行く場合はサードプレイスに該当せず、セカンドプレイスそのものと言えるでしょう。そこには、上下関係があり中立的ではなく、遊び心どころか緊張状態があるからです。

では、日本のサードプレイスには、どのような場所が当てはまるのでしょうか。

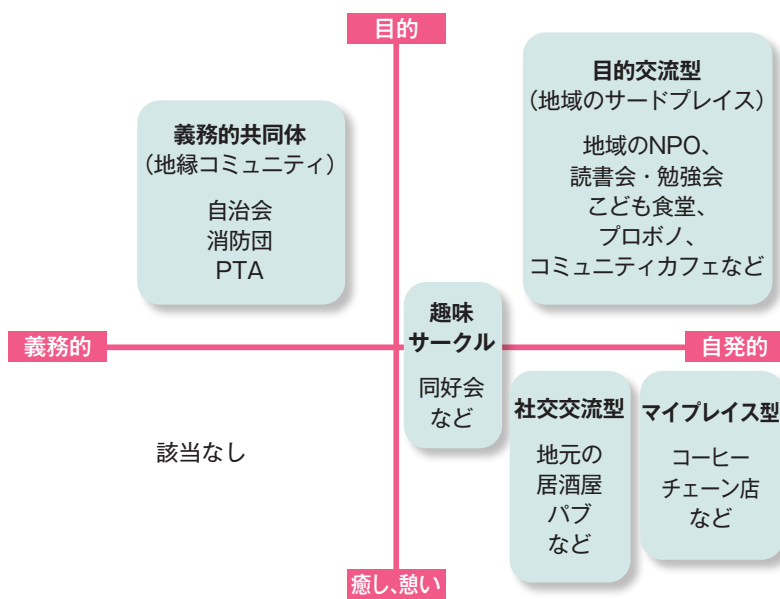
サードプレイスの種類

筆者は、日本におけるサードプレイスを次ページの**【図表2】**のように分類しています。ここでは、日本のコミュニティとサードプレイスを「目的VS癒し、憩い」という軸と「義務的VS自発的」という軸で分類しています。まず、「目的×義務的」に該当するコミュニティは、「義務的共同体」(地縁コミュニティ)と呼んでいます。

義務的共同体とは、たとえば自治会や消

* 出典:『サードプレイス』(オルデンバーグ著、忠平美幸訳、みすず書房、2013年)

【図表2】 サードプレイスとコミュニティの分類



出典：『地域とゆるくつながろうーサードプレイスと関係人口の時代』（石山恒貴編著、静岡新聞社、2019年）

防団のことです。これらのコミュニティは、地域にとつて、なくてはならない必須の存在ですし、地域の機能維持という観点から、さらに重要になっていくでしょう。

ただし、義務的共同体への参加は、建前としては自発的な参加であっても、その地域において何らかの義務的な参加の要素もあることが多く、サードプレイスのような憩いがあるというよりは、むしろセカンドプレイスのような濃密で緊張感のある雰囲気があるかもしれません。これに対し、右側の「癒し、憩い×自発的」または「目的×自発的」は、サードプレイスに該当します。

まず、「癒し、憩い×自発的」ですが、ここではサードプレイスの中でも、マイプレイス型と社交交流型が該当します。

「マイプレイス型」とは、たとえば、スターバックスなどのコーヒーチェーンが典型例です。このようなコーヒーチェーンでは、個人が、本を読む、スマホを見る、パソコンを開くなど、自由に思い思いの時間をリラックスして過ごしています。マイプレイス型は、他者とは交流しないので、サードプレイスの8つの特徴には当てはまりませんが、忙しい日常の中で、ゆつたりと1人で過ごす場も貴重でしょう。そこで、オルデンバーグの定義に対して、拡張的なサードプレイスとしてのマイプレイス型をこの分類に含めることにしました。

「社交交流型」こそ、オルデンバーグが提唱していたサードプレイスの8つの特徴に当てはまる場所です。ここでは、顔なじみの人々と、まつたり気軽に過ごすことができます。日本で言えば地元の居酒屋でしょう。セカンドプレイスに当たる職場近くの居酒屋とは異なり、地位や立場などの上下関係を気にせず、近所の知り合いと賑やかに交流することができ、人生の憩いの場所になるはずですが。

次の「目的×自発的」には、目的交流型というサードプレイスが該当します。目的交流型サードプレイスは、筆者がもつとも注目している場所です。たとえば、NPO、読書会・勉強会、プロボノ（自らのビジネ

スキルなどの専門性をいかすボランティア）、子ども食堂、コミュニティカフェなどが当てはまります。オルデンバーグがもとも提唱していた社交交流型サードプレイスを進化・拡張させた場所とも言えるでしょう。

「目的交流型」とは、個人が自分の興味・関心に基づく目的を実現するために形成されるサードプレイスです。NPOや子ども食堂などの例からわかるように、何らかの社会貢献、地域貢献につながっていく場所です。

ただ、貢献につながるからと言って、単に肩肘を張った堅苦しい場所ではなく、多様な人々と楽しく交流することが可能な場所でもあります。自分の興味・関心に基づき自発的に参加し、かつ楽しさがある場所なので、人生の潤滑油と表現することもでき、だからこそオルデンバーグの示す8つの特徴に当てはまると筆者は考えています。

『人口減少社会のデザイン』（広井良典著、東洋経済新報社、2019年）では、人口増加の時代は、拡大・成長と効率性が重視され、自動車社会となり、街の中心部が空洞化してしまつたとしています。戦後の日本では、アメリカ型の都市設計が志向され、駅前商店街は衰退し、車で訪れることが便利な郊外のロードサイドのショッピングモールが栄えることになりました。

これに対し広井氏は、人口減少社会ではローカル志向、社会の持続性を重視し、街



>>> 出会いを生かすつぎ合いのヒント

【図表3】チガラボの多様なイベントのテーマ

地域	さまざまな地域、食や農林水産業、お酒、くらし
食	未活用魚、牡蠣、オーガニック野菜、ワイン、ジビエ
働き方	起業、キャリア、働き方改革、ワークライフバランス
文化	映画、音楽ライブ、落語、写真、カメラ、アート

テクノロジー	IT、Web、動画、SNS、ドローン、ものづくり
ヘルスケア	姿勢、カラーセラピー、コーチング
社会課題	SDGs、人生100年時代の生き方、空き家、子育て、教育

の中心部を抜けるようにしていくべきだと思っています。これはヨーロッパ型の街づくりであり、カフェなどのサードプレイスが栄えることになりました。

ただし広井氏は同時に、日本では共同体の一体意識と情緒を重視する農村型コミュニティが今まで支配的で、人はそこでつながっていたが、時代の変化とともに農村型コミュニティは衰退しているにもかかわらず、それに代わる、もつと自由にゆるくなる都市型コミュニティが成立していないことが課題だと指摘しています。

筆者は、農村型コミュニティは義務的共同体、都市型コミュニティは目的交流型サードプレイスの特徴に類似していると考えます。目的交流型サードプレイスが発展していくことは、ローカル志向で、効率よりも持続性を重視する人口減少社会の方向性にも合致しているのではないのでしょうか。

サードプレイスの具体例

理想的な目的交流型サードプレイスの具体例として、茅ヶ崎駅からほど近くに位置する coworkingスペース、「チガラボ」を紹介いたします。一般的な会社員が気軽に参加できる目的交流型サードプレイスのわかりやすい事例だからです。

チガラボは coworkingスペースとして、約100名の年代も職種も多様なメンバーが所属しています。フリーランスの方が多

いですが、会社員もメンバーであり、テレワークなどで働く場所になっています。茅ヶ崎は都心への通勤圏でありながら、都心から適度な距離があるので、たとえば週の半分は都心のオフィスで働き、週の半分はチガラボで働くというスタイルが可能です。同時に、チガラボは「人がつながり、たぐらみがうまれるコミュニティ」を目指す姿勢としています。「たぐらみ」とは、チガラボメンバーが、主体的に実施する多様なイベントを意味します。【図表3】は、「たぐらみ」で開催された、イベントのテーマの一覧です。この図表にあるように、イベントのテーマは実に幅広いものです。また、テーマにある、食、酒、キャリアなどは、茅ヶ崎周辺の農園、商店街、事業と協働して行われることがあり、茅ヶ崎という地域との連携が深まります。

チガラボでは、「やりたいこと・アイデアを自由に言える安心安全な場」という考え方を大事にしており、この考え方を「まちの非武装地帯」と表現しています。つまり、チガラボは、一般の会社員の方が、主体的に地域とつながり地域に貢献するイベントを安心して企画・実施でき、



チガラボを筆者のゼミメンバーで訪問

楽しみながら多様な人々と交流できる目的交流型サードプレイスの好事例なのです。

サードプレイスの見つけ方

サードプレイスについて話すと総論賛成であることが多いですが、実際に自分が参加し、地域の知らない人と話すことはハードルが高いという話をよく聞きます。現実的には、自分の知り合いにサードプレイスに連れて行ってもらうって参加するという話をよく聞きます。まずは、自分の知り合いに、サードプレイスに参加しているかどうか、聞いてみるのがお勧めです。

また、一見、義務的共同体であるPTAやマンションの理事会が、目的交流型になる事例もよく聞きます。たとえば、PTAの「おやじの会」や、マンションの理事会で、自発的におもしろいイベントを企画する、ということです。こうした形で、身近な義務的共同体が目的交流型へと発展することもあります。さらに、近所の図書館、coworkingスペース、コミュニティカフェでは、チガラボの「たぐらみ」のようなイベントが、様々に開催されているものと思います。

最初は勇気がいるかもしれませんが、こうしたイベントに、まずは一回参加してみると、サードプレイスとの関わりが生じる可能性ががあります。ぜひ、サードプレイスをうまく見つけて、人生の選択肢を広げてみてはいかがでしょうか。